

中島利郎・河原功・下村作次郎編

台湾近現代文学史

研文出版／2014年5月／542頁／8000円＋税



星野幸代

本書は日本における台湾文学研究の先駆者たちによる、日本で初めての網羅的な台湾文学通史である。執筆者九名および、序章で名を挙げられている二十人近い日本人研究者の四半世紀にわたる集大成であるとともに、本書に収まりきららない台湾文学の多様性と多重性があふれている。

台湾で単行本化された台湾文学通史としては、葉石濤（一九二五—二〇〇五）が戦前戦後自ら台湾文学創作・批評の場を生きつつ上梓した『台湾文学史綱』（文学界雑誌社、一九八七年）が、今なお主要な指針とされている。二〇〇〇年、同著の邦訳版『台湾文学史』（研文出版）が中島利郎、澤井律之訳によって出版された。この邦訳著は中島、澤井両氏による葉石濤への質疑応答と資料的裏づけにより、実証的な訳注と解説、索引とを備えたものであった。原著者である葉石濤、また彼の弟子で台湾文学史家の彭瑞金は、原著を補強した中島、澤井両氏の訳注・解説の学術的価値を高く評価し、逆にそれらを中国語訳して付したバージョン『台湾文学史綱』（彭瑞金序、中国語訳・彭萱、高雄・春暉出版社、二〇一〇年）を台湾で出版するにいたっている。この間、彭瑞金氏による戦後四〇年を中心とした文学史も、『台湾新文学運動四〇年』（東方書店、二〇〇五年）と

して中島、澤井両氏により邦訳された。

本書の編著者の一人、中島利郎氏「あとがき」によれば、上述の葉、瑞氏の台湾人研究者ないし台湾ナショナルリストとしての「自主独立した台湾文学」いわゆる「台湾文学の本土化」を基調とした文学史には深く感じるものがあつた、しかしそれらに対し、日本人の立場で台湾文学史を書いたらどのようなになるだろうか、という問題提起が本書の出発点である(五二六頁)。日本という視座は、日本語で書かれたために、あるいは政治的理由により台湾では可視化されなかつた文学に対して、一種ニュートラルな立場でありうる。「もちろん、台湾文学の主人公は台湾人である」という前提のもと、日本人ならではの角度から台湾文学にかかる問題を提起し、今後の台湾文学研究の更なる深化と拡充に寄与することを本書は目している。

台湾文学の範囲をどのように区切るか。台湾文学に欠かせないこの問いへのスタンスは、序章で明らかにされている。彭瑞金『台湾新文学運動四〇年』

は、日本統治期の新文学運動史は基本的に反抗運動史であるという立場をとるため、彭氏の区切りでは、在台日本人作家および「内地」文壇で台湾を描いた作品などは台湾文学として認められない。それに対し、本書は基本的に黄得時「台湾文学史序説」(『台湾文学』第三卷三号、一九四三年七月)の分類を引き継いでいる。平たく言えば、表現者を台湾人と台湾在住者に限定しないなど、台湾文学を広義でとらえる。葉石濤もまた、「台湾以外の地で出生し、台湾を訪れたこともなく、台湾に関する作品を書き国外で文学活動をしていたとしても台湾文学と見なした」黄得時を、「グローバルでマクロな観点」と肯定しているから(二九九頁)、本書は葉石濤の観点を引き継いでいるとも言える。加えて本書は、「作者は台湾以外の出身であるが、台湾旅行や台湾での生活体験があつて、台湾を去つた後に台湾以外の地において文学活動をなした場合」、具体的には佐藤春夫や真杉静枝らのケースも範囲に含めている。

構成は、前掲・中島氏「あとがき」に

いう紀伝体形式である。すなわち第九章で、日本統治期の台湾近代文学成立から戒厳令解除の現代までを、従来の台湾文学史と同様に編年式に追う。その上で、後半の第十〜十四章は「内地」の作家たち、現代詩史などジャンル別の文学史を配し、前半の編年体文学史を補足補強している。もつとも、編年体部分においても張我軍、頼和、張文環、呉濁流、鍾理和といったキー・パーソンについては、それぞれ活躍した時代を代表させて一節以上を当てるなど、列伝のように読める部分も多い。

以下、従来の台湾文学史では取り上げられてこなかつた点、日本人からの視座によって可能になったと思われる点を中心に紹介したい。

二・二八事件は台湾でも既にタブーではなくなっている。だが第五章第二節「二・二八事件と文学」において、リアルタイムで取材したために遭難した作家から八〇年代以降漸く口を開いた作家にいたる二・二八事件をめぐる語りは、抜粋を辿るだけでも重苦しさに圧倒される。

その中で、日本に亡命した王育徳を言語学者や歴史家としてではなく、二・二八事件をめぐる文学現象の中に位置づける研究は、まだ少ないのではなからうか。

女性文学やクイア文学、また探偵小説などの大衆小説を研究対象とすることは、昨今一般的になってきた。台湾文学のセクシヤル・マイノリティ表象は、寧ろ東アジアではオープンな方である（『台湾セクシユアル・マイノリティ文学』シリーズ全四巻、黄英哲・白水紀子・垂水千恵編、作品社、二〇〇八―二〇〇九年）。それでも、今後日本における台湾文学史の經典となるであろう本書に、「女性文学の系譜」「クイア文学」の節が立てられているのは意義深い（第九章）。また、これらサブカルチャー化されていた文学とは別の次元だが、「馬華文学」が一項目として立てられているのも、台湾文学の線引きについて一つの見解を示している。

同様に、台湾児童文学ないし植民地児童文学として昨今研究がはじまった分野を、本書は經典入りさせた。第一一

章「日本統治期の台湾文学と「内地」の作家たち」で挙げられた『日本のアンデルセン』久留島武彦は、「読み聞かせ」教育の大御所であるが、台湾の文学通史の中に位置づけられたのは初めてではないか。本章では、久留島や宇野浩二の活動により、多くの台湾を描いた童話、台湾の伝説・神話が、円本ブームも相まって、昭和初期の子どもたちに台湾ないし台湾原住民族イメージを植え付けていた様を考察している。

一方で第一章は、台湾を描いた作家として知られる佐藤春夫だけでなく、森鷗外、徳富蘆花、北原白秋、野上弥生子ら驚くほど大勢の「主流」の文学者たちが、史実に基づいて、或いは旅行者として、台湾を描いてきたことを明らかにしている。「内地」と南洋との中継地点、かつ「大東亜共栄圏」の中心地であった台湾は、国策として表象を奨励された。しかし外的要請以前に、作家はこの南国に創作意欲を触発されたことが浮かび上がる。中でも、「霧社事件」を題材とする日本人作家の作品は、戦中戦後から二

一世紀まで視点を変えつつ生み出されており、今後も日本文学の一テーマとなることが示唆される。霧社事件を扱った作家の系譜には、日本文学と台湾文学が分かち難く、グラデーションをなしていることが典型的に現れている。

台湾原住民族文学への注目は始まったばかりとはいえないまでも、やはりマイノリティであるこのジャンルについて、最終章全体を割いていることは画期的である。原住民族が書写言語として初めて獲得したのは日本統治時代の日本語であり、日本語による歌、日記、手紙、警察機関の機関誌『理蕃の友』などへの投稿によって自己表現をはじめ、民族の語りを継承していった。戦後は日本時代に主流だった文学者たちと同様に、約二十年の空白を経て中国語で創作をはじめ、今日長編小説と歴史の描き直しの段階にいたっている。ところでなぜ原住民族の作品は戦前戦中には『理蕃の友』等特殊なメディアに限られ、一般文芸誌に掲載されるにいたらなかったのだろうか。本章の記述を読んだ限りでは、そういう疑問

が残った。

文学史からはみ出してきた作家として、本書は特に葉歩月、黄霊之を初めて組上に載せ、それぞれ型破りな表現者としての魅力にスポットを当てている。第五章は葉歩月を取り上げている。葉歩月の本業は医者、軽妙洒脱な文体で、戦後初期には優れた探偵小説ないし科学小説を残したが、その後の時代の混乱の中で作家としては埋没してきた。没後三五年経って出版された「七色の心」(『日本統治期台湾文学集成』(20)葉歩月作品集(2)『緑陰書房、二〇〇三年])は、葉歩月の母をモデルとして、日本統治時代から一九六〇年代目前まで台湾人の一家族を描いた大河小説であり、「近代台湾の古典的な名作として残っていくに違いない」(二二五頁)と評価されている。なお葉歩月の節は、紙幅の関係で本書から削除されてしまった「台湾の大衆文学史」(前掲「あとがき」)の一部であろう。

第七章第一節は、戦後の台湾で日本語作品を書き続けるという「異常な行為」を続けて二一世紀なお現役の作家・黄霊

之(一九二八)をフューチャーしている。黄霊之は戦後になって日本語創作をはじめ、苦勞の末に中国語をマスター、中文作家として認められたが、日本語と中国語の狭間で葛藤し続ける。七〇年代からは台湾俳句会を立ち上げ、その後三十年にわたる俳人としての業績が日本で評価され、叙勲された。本節は、黄霊之が台湾最後の日本語作家として、特異な「継続性のない歴史的作家となる可能性」を示している。

簡便性というレベルのことで恐縮であるが、文学史という性格上、索引があるのと有り難かった。前述した本書の方法は、編年体と後半の「列伝」を読み合わせることよって、一作家或いは作品についても多様な捉え方を可能にしている。例えば、葉石濤については、序章で台湾文学史研究者としての位置づけがクローズアップされる一方で、その伝記的事項は第八章で詳述される。同様に、黄得時による台湾文学史の五分類は、序章では台湾文学の範囲を検討する意味で挙げられ、第八章では黄と葉石濤の台湾文

学における重点の違いを示しており、それぞれ異なる文脈で提示される。作品の例を挙げれば、山部歌津子の「蕃人ライサ」は霧社事件(一九三〇)を扱った文学として挙げられる一方、台湾原住民族を描いた作品群の中でも登場する。などなど、編年史と作家作品論とを見比べて学びたい者にとっては、索引があることが望ましい。また、編年史では詩史への言及が少なく、各論に当たる現代詩史は一九五〇年代から語り起こされるため、浅学な筆者にとっては、植民地期詩史が別途立てられていたならばより分かりやすかった。むろん、本書の挙げる参考文献を参照すれば済む問題に過ぎない。

総じて、本書は今後、台湾文学通史の基本書として位置づけられるであろう。それとともに、台湾文学の文学史的探究、作品研究、また今後生み出される創作いずれにも、有り余る可能性を示唆している。